A Study of Uga-benzai-ten Faith in the Middle Ages ー Hieizan and “Enoshima-engi” ー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/48123

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

様式　7（Form 7）

学　位　論　文　要　旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

中世における宇賀弁才天信仰の研究　―叡山と「江島縁起」―

（和訳または英訳） Japanese or English Translation

A Study of *Uga-benzai-ten* Faith in the Middle Ages
- Hieizan and “Enoshima-engi” -

人間社会環境学　専　攻（Division）

氏　　名（Name）　鳥谷武史

主任指導教員氏名（Primary Supervisor）　森雅秀

（注）学位論文要旨の表紙
Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

In the doctrinal dissertation, I examined how the iconography and the worship of Benzaiten changed in mediaeval Japan. This thesis consists of four chapters: (1) Introduction, (2) Classification of Benzaiten, (3) Uga-benzaiten found in the iconographic and historical documents, (4) The spread of Uga-benzaiten worship based on the *Enoshima-engi*.

After discussing the background of the research with mentioning the previous works in the introduction, I classified various types of Benzaiten worshipped in Japan according to the iconographic characteristics in the second chapter. In the third chapter I describe how the Uga-benzaiten worship took the position of the previous Benzaiten worship radically in the middle of the thirteenth century, and I clarify the changes of the iconography and doctrine of Benzaiten at this time. Furthermore, through the history of the *tozan-ha-shugen*, which played an important role of spreading the worship of Jippi-benzaiten (Benzaiten with ten arms), I considered the formation of the images of the deity originated from Uga-benzaiten, which corresponds with the development of Benzaiten's doctrine. Finally, I examine the process of acceptance of the Uga-benzaiten's worship, and I point out the existing of a religious group, which significantly contributed to its spread with utilizing the *Enoshima-engi*.

In conclusion, I clarified following three points. (1)Benzaiten can be classified into six types according to its iconography, and Uga-benzaiten has eight major characteristics. (2) Several differences can be recognized between the iconographic materials and the literature sources as to the retinues of Uga-benzaiten, this fact may be caused from the procedure of interpretation of the scriptures of Uga-benzaiten. In addition, several deities depicted in the picture of Uga-benzaiten were unified with Uga-benzaiten as a single deity in the Muromachi Era. As its background, there are some new doctrinal interpretations about the identification of the deity. (3) The *Enoshima-engi* proves that the Benzaiten worship became syncretic with the indigenous religions in the eastern area of Japan, and the changes of Benzaiten worship discussed in the previous chapters correspond with the formation of the *Enoshima-engi*. The activity of Tendai priest group, which expanded into this area of this period, should be emphasized for explaining this fact.

1. はじめに

本稿では、インドより中国を経て日本に請来された仏教尊の弁才天が、中世の日本においてどのように姿を変え、その信仰がどのような人々によって担われ、いかにして諸地域で受容されてきたのかを明らかにすることを目指した。ここで取り上げた中世以降の宇賀弁才天は、おおよそ鎌倉時代前期にその姿を表し、それまでの主流であった請来経典由来の弁才天を席巻するほどの流行をみせるようになる。こうした弁才天の変化が図像から読み取れることは、先行研究においてもつとに述べられてきたことである。しかし、そのほとんどが個別作品の検討を中心としたものであり、信仰を担った人々の活動に対する視点も不足していたように思われる。

よって、本稿では、全編を 4 章に分けて考察をおこなった。まず本論に先立って、中世仏教研究史における神仏習合像研究の新規性と、宇賀弁才天研究の意義、本研究の視座、弁才天研究史を示し、そのうえで、本稿の構成とその意図を説明した。次に、種々の弁才天が存在する中で、宇賀弁才天がどういった存在として位置付けられるかを確認すべく、日本請来以来の弁才天のバリエーションを図像的特徴のうえから分類した。そして、中世以降の弁才天信仰を席巻した宇賀弁才天信仰が着実に根付きはじめる 13 世紀中葉以降、図像がどのように変化し、その背景にどのような教説が存在していたのかを検証した。さらに、宇賀弁才天の発展形態とも言うべき十臂弁才天に着目し、その像容の成立と教説の形成を、信仰の担い手である当山派修験の歴史とともに紐解いた。最後に、宇賀弁才天信仰が受容されていく過程と、その担い手について、相模国江島を例にとって検証した。

2. 本論

第 1 章では、まず中世仏教研究史の整理をしつつ、宇賀弁才天が「異形」の尊格とされながらも、中世の神仏習合世界を探るうえで格好の対象となることを確認し、「人」「思想」「モノ」という 3 要素を軸とする本研究の視座を説明した。さらに、経典・次第・図像・縁起など広範な史料を用い、学問分野の垣根にとらわれない、新たなアプローチで中世の神仏世界に切り込んでいくことの重要性を、弁才天研究史のまとめを通して示した。

第 2 章 1 節では、日本請来から中世にいたるまで、弁才天の像容がどのように派生し、それらがどういった特徴を持っているかを検証した。まず、二臂および八臂の弁才天の儀軌である『大日経』と『金光明最勝王経』に着目すると、大日経系・金光明経系の弁才天は、日本に持ち込まれた当初の段階では厳密に区別されていたと判断される。しかし、平安時代以降の日本において撰述される経典の中では、同一経典内で二つの弁才天が併記されるようになる。10 世紀前半以降、大日経系弁才天と金光明経系弁才天は明確な区分が失われ、混在したイメージ、もしくは一つの尊格が持つ二面的な性格として捉えられていく。また、大日経系と金光明経系は、共に中世にいたるまで、単独の尊像として制作されなかったとみられる。

2 節では、妙音弁才天の像容に注目した。平安時代末から制作されるようになった妙音弁才天像は、楽琵琶を弾奏する人々によって祀られたものであり、その構図はいくつかのバリエーションをもっていたと考えられる。

3 節では、宇賀弁才天の特徴を整理した。その結果、八臂弁才天像が宇賀弁才天像へと変化するにおよび、弁才天そのものの形容について①宇賀神、②持物、③鳥居、④髪型、⑤姿勢、⑥光背、周囲をとりまく神仏について⑦十五童子、⑧同一画中に描かれる尊格という 8 つの点で異なることがわかった。

以上の考察により、日本請来時の弁才天は、大日経系弁才天・金光明経系弁才天・妙音弁才天・宇賀弁才天、さらには混淆型弁才天・天川弁才天を含む 6 種に分類可能であることを示した。

第 3 章では、宇賀弁才天の絵画作例の比較をもとに、どのような図像のバリエーションが生まれたかを確認し、それに伴う教説の内容を偽経・次第によって検証した。

1 節では、まず史料に説かれる宇賀弁才天の姿を、持物に着目して分類した。その結果、腕と持物の配置が史料間で統一されておらず、絵画作例においても、一定の傾向は見出せるものの、いくつかのバリエーションが存在していたことがわかり、史料の傾向と絵画作例の傾向は異なることが明らかとなった。この点については、立像から坐像へ図像の主流が移り変わったことが影響しているとみられる。

また、宇賀弁才天関係史料には、二・四・六・八・十臂の弁才天が確認され、作例にも二・四・六・八臂がのものが存在するが、史料では二・八臂に対する記述が中心で、作例では八臂像が主流であることが明らかとなった。したがって、四・六臂の宇賀弁才天像は例外的作品と位置付けられる。

2 節では、宇賀弁才天が中心に描かれた絵画作例において、同一画中にどのような尊格が描かれるのかに着目し、それらの尊格が弁才天とどのような関係を結んでいるかを、台密の史料を中心に考察した。

まず、絵画作例に描かれた尊格を整理したところ、平安時代までは弁才天とともに描かれなかった尊格が描かれるという傾向が顕著であった。また、大黒天と毘沙門天が描かれる例が多く、これらは宇賀弁才天信仰の発達とともに関係づけられた尊格であると解釈される。さらに、史料上では、大黒天と毘沙門天は弁才天との同体説が説かれ、同一画中に描かれることは、三者の密接な関係を示していると考えられる。

さらに、宇賀神と大黒天に着目すると、荒神・聖天・第六天魔王・弁才天を巻き込みつつ、大黒天・大物主神・三輪明神・大国主神・宇迦之御魂神・宇賀神との間には複雑な同体説が形成されていたことがわかった。

また、こうした天部を中心とする同体説が展開した結果、室町時代には三天大黒天、荼枳尼天（三天合行像）という三天一体の神が表わされるようになる。このような図像が現れる背景には、鎌倉時代末期までに台密・東密それぞれで形成された教説があり、まず尊格をそれぞれ独立した形で配置する構図がとられ、室町時代以降、三天を合体させる形で表わされるようになったとみられる。

さらに、弁才天十五童子像の中で、荒神と愛染明王が対照的な位置に置かれることに着目した結果、両者は『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』と注釈書を典拠としており、表裏一体の関係を示すものと理解された。とりわけ、子島荒神が描かれることについては、その姿が宇賀弁才天によって鎮撫されたことを象徴するものであると解釈した。

3 節では、宇賀弁才天の発展形態の一つとして十臂弁才天に着目し、その図像と偽経、さらには信仰の担い手について考察を加えた。

現在一般に天川弁才天と呼ばれる尊格は、三つの蛇頭をもつ十臂の弁才天であるが、16 世紀までの天川弁才天は、台密によって形成された八臂の宇賀弁才天の姿で表わされていた。

また、15 世紀後半から 16 世紀半ばの南都において、天川弁才天曼荼羅図が制作された様子が伺え、南都の諸寺院にも天川弁才天信仰が受容されていた。しかし、その教説形成に南都の学侶が携わった形跡はなく、一方で、高野山内では十臂弁才天関係史料が転写されていた。その理由の一つには、南北朝時代末期以降、南都諸大寺に対して当山派の自立性が高ま

ったことが挙げられる。

さらに、十臂弁才天関係史料が高野山内で転写されたことについては、16 世紀初頭、高野山の行人が当山派に加入したことが背景にあると考えられ、行人によって高野山内に天川弁才天信仰が伝播された結果、天川弁才天が高野山に関係づけられたと結論した。

第 4 章では、偽経や次第から確認することが困難であった宇賀弁才天信仰の萌芽期について、「江島縁起」をもとに確認していった。

1 節では、「江島縁起」の諸本を分類し、それぞれの共通点や相違点を整理した結果、①真名本系、②仮名本系、③派生系、④現存不明の 4 系統に分類し、真名本系が最も古い形式であることを確認した。

2 節では、「江島縁起」で語られる高僧参籠譚の中に登場する人物に目を向けた結果、真名本の高僧参籠譚は、もともと江島や周辺地域に関係深い人物であった、泰澄・道智・安然について、既存の説話を再構成し、役行者・空海・円仁という、広く知られた高僧を主役として増補したものとの結論に至った。

3 節では、「江島縁起」や、江島を取り巻く神話世界を紐解いた。まず、同縁起前半の江島創造譚に注目し、そこに暴君として登場する五頭龍は、地主神としての性質を持つ、古代の神の性質を帯びた存在であり、新たに現れる弁才天によって仏教に取り込まれるという、仏教による地主神信仰包摂の過程を描いた物語と解釈された。

次に、縁起冒頭の島生みの内容に着目した。火と水、そして龍神による島の造成という物語は、海底噴火という現象をもとに創作され、相模国周辺で生まれた神話の系譜に位置づけられる物語であった。さらに、島生みの中心的役割を果たす弁才天は、龍と同じ性格を有していることがわかった。

4 節では、江島と走湯山の関係に着目した。まず、14 世紀初頭には江島の龍窟と、富士の人穴が同一視されるという事態が確認された。そこからは、地底に龍が住むと言われていた走湯山を合わせ、この三所が関係づけられている様子が見えてくる。一方、走湯山・富士山・箱根山・江島は、辺路行を用いて山と海を行場とする修験者によって結ばれており、人的ネットワークも形成されていたと言える。

5 節では、歴史書と、「江島縁起」との間の関連性を検証した。その結果、仮名本に語られる良真の事績は、仏牙舎利請来譚が変化していく過程で形成されていった「良真」像を反映したものであり、このことから、仮名本の成立が室町時代まで降るものであるとの説を提示した。また、12 世紀以前の江島信仰を確認した結果、もともと弁才天信仰があったところに、北条家による働きかけによって武家の側からも弁才天が勧請されたと推測される。「江島縁起」と『吾妻鏡』の間にある内容の齟齬は、もともと存在していた弁才天信仰の上に、武家が新たな弁才天信仰を上書きしたことによるものと考えられる。

6 節では、真名本に語られる弁才天の特徴を整理することで、弁才天信仰史から見た江島の弁才天の位置付けを行った。その結果、真名本の弁才天は、金光明経系弁才天と宇賀弁才天の折衷的特徴を有していると結論された。一方、真名本末尾の『安然秘所記』と箕面山の縁起を比較した結果、『安然秘所記』は後世に増補されており、真名本から『安然秘所記』を除いた部分は、成立を 13 世紀前半にまで遡るとの説を示した。

7 節では、真名本が現状の姿となった過程や、形成に関わった人物を検証した。その結果、現存の真名本の構成に至るまでには、第 1 部から第 3 部までの順で 3 段階制作の可能性と、第 1 部と第 2 部が同時期に成立し、第 3 部を増補したという 2 段階制作の可能性が考えられ、それぞれの制作過程には異なる人物が携わっていたと推測された。

第 1 部は、走湯山を拠点とする修験者が制作に携わったと推測される。また第 2 部は、13 世紀半ばには宇賀弁才天法の知識を共有し、安居院流の流れを汲んでおり、走湯山から江島にかけてを行場とする修験者と考えられる。さらに、第 3 部は、伊豆国あるいは相模国を拠点とする、宇賀弁才天法に詳しい天台僧とみられる。

したがって、現存する真名本は複数の時代の弁才天信仰を重層的に含んでおり、その内容は、地主神の信仰を仏教の弁才天が包摂し、さらにその弁才天の信仰が宇賀弁才天信仰に変化する過程が、単一の縁起の中で語られていると結論される。

また、江島の弁才天が宇賀弁才天の影響を色濃くしていく背景には、東国を拠点に活動していた天台僧の存在があり、縁起の制作や偽経の書写といった活動を通して、着実に東国へ台密の宇賀弁才天信仰を定着させたと考えられる。

3. 結語

以上の内容をまとめると、次のようになる。すなわち、宇賀弁才天の教義は、叡山の天台僧が中心となって形成されており、そこで生み出された言説は、逐次的に絵画作例へと表れていった。その中では、複数の尊格が同体説によって結び付けられていき、その関係を視覚的に示した習合像へと発展して行く。

さらに、このような宇賀弁才天信仰が、叡山や東国の霊場を舞台として、台密によって形成されたものとするならば、天川弁才天は、その宇賀弁才天を基盤としつつも、高野山や南都の霊場を舞台に活動していた当山派修験者によって、東密の教説をもとに形成された弁才天信仰であると言えよう。すなわち、13 世紀初頭に台密が生み出した宇賀弁才天信仰は、3 世紀を経て、東密によってさらなる変貌を遂げたことになる。

平安時代まで全く存在が見られなかった宇賀弁才天は、13 世紀の後半に突如として歴史の舞台に姿を現したかのように見える。しかし実際は、平安時代以降の日本において弁才天の姿は徐々に変化しており、宇賀弁才天も叡山と東国という 2 所において、13 世紀を通して姿を変え、信仰を醸成していった。また、その信仰を担った宗教者は、もともと存在していた地主神や弁才天の信仰を利用し、自己に有利となる形で既存の信仰を包摂・再解釈することによって、信仰圏の拡大を飛躍的に進めたと考えられる。

学位論文審査報告書

平成２９年　２月　３日

１　論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専　攻　　人間社会環境学

氏　名　　鳥谷武史

２　学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

中世における宇賀弁才天信仰の研究―叡山と「江島縁起」―

３　審査結果

判　　定（いずれかに○印）　○合 格　・　不合格

授与学位（いずれかに○印）　博士（ 社会環境学・○文学・法学・経済学・学術 ）

４　学位論文審査委員

委員長　　森　雅秀　㊞

委　員　　西村　聡

委　員　　平瀬直樹

委　員　　黒田　智

委　員　　矢口直道

委　員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

５　論文審査の結果の要旨

本論文は、日本中世における弁才天信仰について、その成立、受容と変容、地域的展開などを、現存する作例、関連する文献、聖教、諸史料等を駆使して総合的に解明した労作である。中世の日本仏教の信仰世界を、弁才天という仏教の尊格を通して見事に描き出した画期的な論文で、仏教学、日本史学、日本文学、美術史などの幅広い分野に大きな影響を与えることが期待される。全体はきわめて大部であることに加え、新出資料や従来の研究では看過されていた重要な文献を数多く発掘し、論文の随所で新たな知見を提示している。

全体は五つの章で構成されている。第一章は論文全体のイントロダクションとして、中世仏教史に関する最新の研究情勢をふまえ、弁才天を取り上げることの意義、その分析のための視点、本論文で用いる主要な資料などを明らかにしている。とりわけ、仏教の経典、論書、儀軌、次第書のみならず、縁起に代表される文学作品や歴史書なども重要な資料と位置づけ、さらに実際の作例を通して、弁才天信仰に対して学際的なアプローチをとるという分析方法を示している。

第二章「弁才天の分類」は、日本の弁才天をその図像学的な特徴から、いくつかの形式に分類し、それぞれの特徴、図像の典拠、成立と変化などを克明に跡づけている。日本の弁才天の基本的な形式は、日本に弁才天が伝えられた当初は、『大日経』にもとづく二臂で琵琶を持つ形式と、『金光明最勝王経』にもとづく八臂をそなえそれぞれの手に武器を中心とする固有の持物を持つふたつであったが、日本内部で独自の展開を遂げた。すなわち二臂の弁才天は妙音弁才天に、八臂の弁才天は宇賀神と習合した宇賀弁才天へと展開し、さらに後者は、蛇の頭を持つ天川弁才天という特異な形式へと発展していった。本章ではこれらのタイプの弁才天について、関連する文献と図像を網羅的に検討することで、それぞれの形式の成立と影響関係、混淆のあり方などを明らかにしている。

第三章「図像・資料よりみた宇賀弁才天」では、前章の内容をふまえ、中世日本でとくに流行を見た宇賀弁才天と天川弁才天を重点的に取り上げ、その図像形式がどのように作られ、展開していったかを論じている。その結果、宇賀弁才天の図像的特徴が、文献と作例では必ずしも同じようには推移せず、それぞれが独自の変化をとげていることが明らかになった。また、宇賀弁才天とともに描かれる尊格に着目し、その類型を分析することで、宇賀弁才天を中心とした天部の神がみ、とくに大黒天、荒神、吒枳尼天などの中世日本特有の異形の神がみからなる複雑かつ壮大な信仰の世界が、その背後に存在していることが浮かび上がってきた。また、

天川弁才天については、天川という地域と密接な関係を持つ高野山がその信仰の普及に関与したことを、高野山に現存する新出資料から明らかにした。さらに、その背景として高野山と関連の深い修験道の当山派の存在も指摘している。天川弁才天については、従来、台密との関係が重視されてきたが、むしろ、東密が積極的にその普及に関与したことが注目される。

第四章「宇賀弁才天信仰の広まりと「江島縁起」」は、本論文の白眉とも呼ぶべき部分で、きわめて充実した内容を持つ。日本の弁才天信仰の拠点のひとつとして名高い江島は、東国における弁才天信仰形成に大きな役割を果たした。本章では「江島縁起」と総称される江島における弁才天信仰の由来を記した文献を中心に、関連する経典（日本撰述の偽経を含む）、史料、儀軌、次第書、歴史書などを詳細に検討することで、宇賀弁才天の成立過程そのものと、その背景にある中世の日本仏教全体のあり方を総合的に考察している。

はじめに、「江島縁起」に真名本、仮名本の二系統、およびその派生的な複数の系統があることを確認し、それぞれの内容と先後関係を明らかにした。その上で、「江島縁起」の成立のプロセスにおいて、高僧にまつわる物語、国生み神話、仏教による地主神降伏神話、龍神伝説など、さまざまな神話や伝承が取り込まれていることを示した。また、「江島縁起」が成立した相模国と隣接する伊豆国の走湯山に着目し、その由緒を伝える「走湯山縁起」を「江島縁起」とあわせて分析することで、この地域に弁才天信仰を核とした修験者のネットワークが存在し、その拠点には富士山や箱根山も含まれることがわかった。

続いて、『吾妻鏡』などの歴史書に語られる弁才天と「江島縁起」との比較考察を行い、その内容の違いから、それぞれの付加部分の抽出とそれらが加えられた理由を明らかにすることで、「江島縁起」の形成過程のより綿密な分析が可能となった。さらに、「江島縁起」の諸本の中で最も古い系統と考えられる真名本を、箕面山の縁起である『箕面寺秘密縁起』と比較した結果、真名本の末尾に登場する「安然秘所記」という文献にもとづく部分が後世の付加部分で、それを除く全体は、13 世紀前半というきわめて早い段階ですでに成立していたことが明らかにされた。

これらの考察を統合し、さらに関連文献や人物の伝承等の分析も加え、現在残されている「江島縁起」が異なる時代に付加された重層的な内容を持ち、最古の真名本に関しても段階的に成立したことが示され、その背景に東国の修験者のネットワークと、それに対して大きな影響力を持った比叡山の天台宗の僧たちがいたことが確認された。そして、江島を中心とした弁才天信仰が自然発生的なものではなく、当時の日本仏教の中核を担う天台僧たちによる戦略的な宗

教活動の結果であることが明らかとなった。

最終章の第五章は本論文の結論であるが、これまでの議論を整理し、日本における弁才天信仰の形成と展開を総合的に論じている。とくに、第四章で明らかになった宇賀弁才天の信仰の拡大に天台僧が深く関与したことと、第三章で扱った天川弁才天の普及に東密が貢献したことを包括的にとらえることによって、弁才天信仰の展開を通して、中世の日本仏教に対して、あらたな枠組みを提示することができた。

以上、論文の概要を紹介してきたが、はじめにも述べたように、本論文は弁才天信仰という仏教の信仰の中ではミクロな事例を扱いながらも、中世の日本仏教研究というマクロな世界にまで考察は及ぶ。それは、筆者の扱った材料の多様さと豊富さ、ユニークな視点、分析の緻密さ、発想の柔軟さなどによるものであろう。美術史的な作品分析や文献資料の正確な読解力もそれを支えている。高野山や江島などでの現地調査も数多く重ね、それまで知られていなかった貴重な文献をいくつも発掘し、その意義を示したことも特筆すべきである。近年、多くの研究者の注目している中世の日本仏教の研究に大きな貢献をなすことは確実である。

審査委員会においては、先行研究の紹介にいくつか重要な業績が抜けていること、第四章で扱った「江島縁起」については、真名本に対して仮名本の分析が若干、手薄であったこと、筆者が頻用する「異形」ということばにさらなる注意を払う必要があること、弁才天をふくむ一部の図像資料が考察の対象になっていないことなどが指摘されたが、いずれも論文の瑕疵とは言えず、今後の研究においてさらに検討すべき課題に位置づけられると判断された。

以上の評価をふまえ慎重な審査の結果、審査委員会は本論文が博士の学位を授与するに十分な内容をそなえていることを確認した。